
人間の境界線

狸小屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人間の境界線

【Nコード】

N5796A

【作者名】

狸小屋

【あらすじ】

三年前、明は遥と出会った。最初は遊びのつもりだった明も、遥の純粋な心と笑顔に徐々に惹かれていく。そんな中、ある出来事によって遥は深い傷を負ってしまう。

第1話 「拭いきれない不安」

カーテンの隙間から差し込んでくる月明かりだけが部屋の中を照らしている。箆笥もテレビも、月光によってなんとかその輪郭だけをうつすらと浮かび上がらせているだけで、はつきりとその形は判別できない。明は自分が闇の中に溶け込んだような錯覚を覚えた。

暗闇は人の精神を肉体から切り離して、哲学者や詩人にさせる。

明は急に寂しい気分になり、まるで自分が一人きりになってしまったような気がした。明はなんだか不安になり、布団の中で右手を伸ばす。

手の甲が隣で寝ている遥のわき腹に触れる。生き物だけが持つ心安らぐ暖かさが、遥に触れた部分を通して明に伝わる。

遥はちゃんとそこにいた。明はほつと胸をなでおろす。明は体を横にして遥の顔を見つめた。遥は気持ち良さそうに寝息を立てている。明は幸せというものを改めて実感した。

明は今のよう眠っていると時折不安になることがある。暗闇の中に包まれていると強い孤独を感じるようになってしまったのだ。そうなる遥が隣にいたことを確認しなければ、もう眠れない。

数日前には、ふと目が覚めて隣を見ると遥がいないことに気がつき、顔を青くして慌てて布団から飛び出したこともあった。しかし、遥は喉が渴いたので烏龍茶を飲み居間に行っていただけだった。遥は明の慌てようを見て笑った。明も照れ隠しで笑った。

明は、自分でも最近の遥を失うことへの不安は少々異常だと思う。こんなことは遥にはとても言えないが、こんな調子ではもし遥が明の前から姿を消すようなことがあれば、明は間違いなくノイローゼになってしまっだろう。

明はそんな自分の姿を想像して、すっかりしろ、と自分を叱咤した。遥は俺の前から姿を消したりはしない。しかし、遥がいなくな

つてしまうという、嫌な想像はなかなか打ち払うことが出来なかった。

自分がこんな状態になってしまった原因を、明はわかっている。

一ヶ月前のあの出来事が影響しているのだ。あの病院での佐々木という医師との問答は明の精神を少々狂わせた。無論、あの男の言いつ分を少しだつて受け入れたわけではない。ただ、これまで自信を持っていた『自我』というものに不安を感じるようになってしまったのだ。自分とは一体何なのか。自分が今感じていることは本当に『心』というものから生じたものであるのか。そもそも『心』とは何か。

人には踏み込んではいけない領域というものがある。佐々木はその境界をやすやすと飛び越えてしまった狂人なのだ。確かに佐々木の成したことは他の人には真似のできない凄いことだった。しかし、それは常人の神経を持っていれば到底認めることの出来ないものだ。あのように狂わなければ、人間は神の領域と呼ばれる真理には到達できないのかもしれない。だが、狂うことでしか真理に到達できないのなら、俺は真理など知りたくもない、と明は思った。

現に、世の中の多くの人々がもし『倫理観』というものを持ち合わせていなければ、あの男の話も実は素晴らしいことなのかもしれない。だが、俺の心はあの男の思想の全てを拒絶した。佐々木の思想を受け入れるわけにはいかなかった。俺は人間の心を持ち続けたかったから。

佐々木は人間の心というものを持っていなかったのだろう。

だから、あの男は自らの偉業を理解しようとしないう俺のような人間を奇妙に思っているはずだ。

今思い出しても身震いする。もし、遥があのままあの病院にとどまっていたら

この安らかな寝顔を永遠に失っていたかもしれない。明は遙を見つめながら、そう思った。

明は遙が目を覚まさないように気をつけながら、その前髪を右手でそつと掬い上げた。痛々しい額の傷跡がさらけ出される。あの事故で負ってしまった傷跡。遙は未だに気にしているようだが、それも無理のないことだろう。これだけの深い傷を負ってしまったのだから。あの男が言っていたように、この傷跡はおそらく一生消えることはなさそうだ。明は中指で、そこを優しくなぞった。

明も始めはショックを受けた。だが、よく考えればこの傷だって遙の一部なんだ。俺はそのままの遙を愛したいんだ。明はようやく眠れそうな気がしてきた。

明日の朝目覚めたときにも、遙は必ず隣にいてくれる。一ヶ月前、遙と一緒にあの病院から逃げ出した俺の決断は間違っていないかった。そう確信して、明は目を閉じた。

十分後。明は深い眠りに落ちた。子供のような顔で眠り続ける明。夜はまだ長い。

だが、その明の隣に遙はいなかった。

第1話 「拭いきれない不安」(後書き)

第一話だけではまだジャンルがよく判らないと思いますが、一応ホラー系？みたいな感じです。でも、それだけではなくて、いろんな要素をこった煮にしたような感じで、かなり気合を入れて書いた作品です。

読んでくださるだけでも本当に嬉しいです。さらに感想批評などいただけた時には飛び上がって喜びます。

もしよろしければ、この続きにもお付き合い下さい。

第2話 「遥との出会い」

1ヶ月前

会社ではみんなそれぞれの仕事を終えて、家路に着き始めていた。携帯電話で奥さんに、仕事を終えて今から帰ると連絡をしている課長。笑い声をあげて話しながら、肩を叩き合っている同僚。おそらくこれから飲みにも行くのだろう。

明もデスクに散乱した書類を鞆に詰め込んで、帰り支度をしていった。しかし、明は頭では別のことを考えていた。恋人の遥のことだ。家で明のために夕食を作って待つてくれているはずの遥の姿を想像していた。

明は、遥と付き合いはじめてもう三年になる。

知り合ったきっかけはドラマチックでもなんでもなく、友人主催の合コンだった。明は大学時代から女性にはもてたほうで、自分でもそのことを自覚していた。明がこれまで付き合ってきた女性は、彼にとつては単なる娯楽の一部でしかなかった。女性と出会って、適当に遊んで、ホテルへ行く。そのゴールまでいかにして到達するか。徐々に相手の気持ちを盛り上げて、いかに自分の思い通りに相手の心を掴むか。サッカーの作戦でも考えるようにして、自分の考えた筋書き通りに事が進む。そのときに明はまるでゲームに勝ったような快感を覚えた。

男女関係なんてきつとそんなゲームみたいなものだ。心が通じるなんてそんなものは幻想だ。赤い糸なんてものは少女漫画の中だけにしてくれ。明はそんなふうに考えていた。しかし、駆け引きを楽しむ恋愛ゲームの繰り返しにだんだん嫌気が差し始めていたのも事

実だった。そんな明だったから、遙と合コンで出会って初デートに誘うまでは、いつも女性を誘うときのように完全に遊び感覚のつもりだった。

合コンの三日後。明は仕事を早めに切り上げて、遙を素晴らしい夜景を見ることが出来るレストランに連れて行った。ここは明が女性と付き合う初デートのときに必ず連れて行く場所だ。長年務めているウエイターらしき男性が、来るたびに女性を変えている明の顔を覚えてしまったようで、やっかみ半分、羨望半分のまなざしを浴びせながら料理を置いていった。そんなまなざしを受けることも明にとってまた快感だった。

料理も一通り出揃って、ここからが恋愛ゲームの始まりだ。

テーブルを挟んで交差する視線。共に笑顔を見せながらの腹の探りあい。気のあるそぶりや意味ありげな台詞を交わす。ときには押してみたり引いてみたり。そんないつもどおりの応酬が繰り広げられると思っていたのだが、食事を続ける間に遙からそういった駆け引きが持ち出される気配は一切なかった。

遙は会社での面白かった出来事や、自分の生い立ちなどを目を輝かせて一生懸命喋っていた。そして、明のちよつとした冗談によく笑った。そこからは恋愛の駆け引きといったものは感じられなかった。明はなんだかじれつたくなつてたまに鎌をかけてみたりしたが、そんな明の思惑に気づきもしないのか、遙はなおも楽しそうに話を続けるだけだった。

レストランを出て、だいぶ遅くなったのでこの日のデートはそこで終わった。明は車で遙のマンションまで送っていったが、明は家に帰ってもなぜか遙のことが頭から離れなかった。

おかしい。これは俺のペースじゃない。なんだかあの子に引きずられている気がする。全く、あの子は一体どういう子なんだ。

思い通りにいかない展開に苛立ちと悔しさを感じながらも、何となくその笑顔から感じられる純朴さが気になり、その後も何度か会うようになった。

明は遥の笑顔を見ると、なんだか暖かい気持ちになる。自分でも信じられなかったが、時がたつにつれて明はそんなことを感じ始めるようになっていた。彼女が笑えば明も笑う。明が今まで付き合ってきた女性とは違い、一緒にいればいるほど、自分が彼女に惹かれていくのを感じた。

恋に理屈など関係ない、というどこかで耳にしたようなフレーズ通りの体験をまさか自分がすることになるとは。そんな自分に明は気恥ずかしさを感じながらも、どこか嬉しさを感じた。

そして、いつの間にか明は遥のことを本気で思うようになっていた。これが本当の恋というものだったのか。今まで自分がしてきたのは恋愛でさえなかったのだということを実感した。二十三歳にもなっってこんな感情を初めて感じるなんて、自分の青さに苦笑するしかないが、妙に明は幸せだった。

そして、出会って一ヶ月が過ぎた頃。明は生まれて初めて本気の告白をした。駆け引きも何もなくストレートに。遥に気持ちを伝えるには婉曲表現では伝わらないということをやく悟ったのだ。いつものように食事をしてから、公園に向かった。ベンチに座って、明は遥の目を見つめる。

しばらくの沈黙。それから明は心を決めた。

「あの、言いたいことがあるんだけど聞いてくれる？」
「何？」

遥は小動物を連想させる丸い目を明に向けた。
「なんで俺緊張しているんだ？こんな状況もう慣れているはずなのに。」

「えーとね、あー、つまり」

うまく言葉が出てこない。遙はじつと明の顔を見つめている。

明は緊張を振り切るように大きく深呼吸して、思い切って正直な気持ちを言葉にした。

「好きです。俺と付き合ってください。」

ああ、だめだこりゃ。やっぱり自分の素直な気持ちを人にぶつけるなんて、俺の流儀じゃない。ダメならダメでしょうがない。遙から断られる不安を覆い隠すように、明はなんだか妙な言い訳を心の中で必死にしていた。

「ふふっ」

遙が笑う。

「へ？」

「明くんって面白いね。はじめてあつた時はもつとクールな人かと思ってたのに。今の告白なんて、なんだか中学生みたい。ふふふ」
やばい、笑われてる。どうしよう

やっぱりストレートすぎたかな。ああ、もつといつもみたいにちゃんと口説き文句を考えてくるんだつた

明は遙の笑いに合わせて苦笑いを浮かべる以外に、どういう表情を浮かべていいのかわからなかった。

「じゃあ、今度はどこに連れてってもらおうかな」ぼそりと彼女が言う。

「へ？」

「そうだ、この際もつと中学生気分を味わうために遊園地なんかどう？久々にジェットコースターに乗ってみたいな」

それを聞いて、明は確認するかのように遙に問う。

「じゃあ、それってつまり オッケーってこと？」

「当たり前でしょ。嫌だったらこんな何回も会っわけないじゃない。もう、明くんしっかりしてよね」

そう言って遙は、また微笑んだ。

それを聞いて、明は思わず何年ぶりのガッツポーズを見せてしまった。

第2話 「遙との出会い」（後書き）

わかりづらいかもかもしれませんが、この第2話からは、1行目にあるとおり第1話から1ヶ月前の話です。それをうまく表現できればよかったんですが、なかなか難しいですね。よくわからなかった方はもう一回読んでみてください（笑）

作者は恋愛の絡む話を書くのが初めてだったので、結構苦労しました。でも書いてて楽しかったです。ちなみに、この第2話は話全体から妙に雰囲気が出ていく気がします。

もし、よろしければこの続きもお付き合い下さい。

第3話 「事故」

それからの毎日は明にとって本当に充実したものだった。

遥の誕生日のために、遥が喜ぶ姿を想像しながらプレゼントを選ぶときの楽しさ。

恋愛の駆け引きなど関係なく、自分の思ったことを素直に語り合うことのできる喜び。

初めて遥を家によんだ夜には、体だけでなく心が繋がるという感覚を初めて味わった。

好きな人がいるというだけでこんなに世界が変わるものなのか、と明は驚いた。なんだか他の人にもこの幸せな気分を分けてあげたくなる。明は昔の恋愛に関して自分勝手だった自分を恥じるようになった。そして、遥に出会えたことに感謝した。

初めのうちは明はこの気持ちもいつか冷めていくのではないかと思っていたが、その後も遥と出会ったときの新鮮な気持ちを失うことは全くなかった。もう最近では、彼女と結婚しようと思い始めていた。間違いなく彼女となら幸せな家庭が築ける。明はそう確信している。

そんな昔のことを思い出しながら、帰宅の準備の手が止まっていることに気づき、明ははっとした。時計を見るともう九時近い。遥もすっかりお腹をすかせているに違いない。もしかしたら機嫌を損ねているかもしれないぞ。感傷に浸っている場合じゃないな。明は改めて書類の整理を始めた。

しかし、今日の夕飯は一体なんだろう。お世辞にもおいしいとはいえない遥の料理の出来を明はいつも冷やかしているが、実は回を重ねることにちよつとずつおいしくなっていることに気が付いていた。どうやら密かに料理を勉強しているようだ。俺なんかのために料理を練習してくれている。味うんぬんよりも、明にはそのことがなによりも嬉しかった。

明は遥が料理に悪戦苦闘している姿を想像して、一人にやけそうになる表情をこらえた。

そして、明が帰り支度を終えて席を立とうとした、そのときだった。

突然、明の携帯電話が鳴った。

遥が待ちくたびれて電話してきたのかと思ったが、その番号は登録されているものではなく、見覚えのない番号からかかってきたものだった。

一体誰からだろう？

遥を待たせているし、英会話スクールとかの勧誘の電話だったりしたら面倒だから出ないでおこうか。明はそうも思ったが、十回以上もコールし続けてもなお鳴りつづけているので、仕方なく電話に出ることにした。

「はい、もしもし。」

遥が家で待っているという幸せな想像は、その電話によって壊されることになった。

それは、遥が交通事故にあったという病院からの連絡だった。

遥が事故にあったのは近所のスーパーで買い物をした帰り道だった。

スーパーで買った夕飯の具材をビニール袋に一杯に詰めて、遥は明の家に向かっていた。

遥はその日の夕飯の献立はカレーライスにする予定だった。時間も遅くなり始めていたので、会社から帰ってきた明を待たせないように、急ぎ足で明のアパートに向かっていた。まだ夕方なので普通の人ならまだ余裕な時間だろうが、遥は料理が下手なので普通の人の倍は時間がかかってしまうからだ。

今日はうまく作れるかな。この間作ったコロッケはちょっと焦げすぎちゃったし。

明は笑いながら、「なんだよこれー。こんな色のコロッケ見たことないよ。ほんとにこれ食べれるの？」などと言っていたが、その大盛りのコロッケを残さず食べてくれる明の優しさを私はよく知ってる。

でも、「おいしい」って明に言ってもらえるようになりたいな。そのためには頑張らなくっちゃ。

遥がそんな決意を固めながら、横断歩道を渡っていたときだった。猛スピードでバイクが遥のほうに突っ込んできたのだ。信号は青だったにもかかわらず。バイクの運転手はあわててブレーキをかける。「あっ！」

遥はバイクが迫っていることに気が付き、叫び声をあげた。耳をつんざくようなブレーキ音が辺りに響く。遥が手に提げていたビニール袋が宙に舞い、ジャガイモや玉ねぎなどが辺り一面に散らばった。間一髪で、遥はバイクとの正面衝突は避けることができた。

しかし、遥はバイクのミラーの辺りに右肩を当ててしまい、その衝撃で激しく転倒した。その際に、額部分を思いつきり地面のアスファルトに打ちつけてしまった。

「う　　う　　う　　」

遥はうめき声を漏らす。頭が割れそうに痛い。まともに声も出せ

ない。

遥をはねてしまった運転手は、バイクにまたがったまま、倒れている遥の姿を呆然と見つめ、ただ立ち尽くしていた。気が動転しているためか呼吸もままならないようで、激しく肩を上下させていた。

その時、彼の心の中では天使と悪魔が激しく戦っていた。

『何をしている。早く病院に通報するんだ。』と天使は必死に訴える。悪魔は『早く逃げてしまえ。ばれやしないさ。』と囁いてくる。運転手の心は良心と保身の間で揺れ動いていたが、数秒後、とうとう彼の心の中では悪魔が勝ってしまったようだった。そして、運転手は「俺のせいじゃない」と呟いて、倒れている遥を一瞥し、走り去っていった。

人通りの少ない道路だったため事故の目撃者はいなかったが、バイクが走り去ってすぐに、先ほどのブレーキ音を聞つけた四十代後半くらいの女性が家から飛び出してきた。

「ち、ちよつとあんた！しっかりして！大丈夫？」

女性は倒れている遥を見て、狼狽しながらもなんとか心を落ち着けようと深呼吸をした。それから、意識があるのかないのかはつきりしない遥に伝わるように大きめの声で言った。

「あんた！今すぐ救急車呼んであげるからね！待ってて！」

遥は返事をしたかったが、顎をわずかに縦に動かすのが精一杯だった。

家の玄関へ駆けだしていく女性の背中を視界に捕らえながらも、遥は自分の意識が遠のいていくのを感じた。

第3話 「事故」 (後書き)

次話あたりから話が本筋に入ってきます。どんな展開になっていくのか それは読んでからのお楽しみということで

この話の感想評価などいただけたら、思わずガッツポーズしてしまうほど喜びます (笑)

この話の続きもよろしければお付き合い下さい。

第4話 「傷跡」

遙が交通事故にあったという一報を受けて、明は飛び出すように会社を出て、病院に向かった。交通事故にあったと聞いて、頭が真っ白になってしまつて、その後のことはあんまり思い出せない。

後になって考えてみると、よくあの状態で病院まで辿り着けたものだ、と明は思う。明は電話で遙の容態もろくに聞かず、もうパニックになりかけていた。相当な醜態をさらしていたような気がする。

記憶がはつきりしているのは、遙の病室に着いたあたりからである。気が付くといつのまにか明は病室にいた。遙は病室のベッドで横になっていた。特に包帯を巻いていたりしているわけではなかった。怪我もなさそうに見えた。思っていた以上に、容態は悪くなさそうだったので明はほとした反面、さっきまで慌てふためいていた自分が少し恥ずかしくなった。

明は気遣うようにして声を掛けた。

「大丈夫かい？ ひどい目にあつたね。どこか痛いところはない？」
だが返事はなかった。遙は悲しそうな目で僕を見上げているだけ。
明は、事故にあったことがよほどショックだったのだろうかと思つた。

「本当に大丈夫？ しかし運転手のやろう許せないよ。遙にもしなにかあつたら――」

そういう明の言葉を途中で遮つて、遙は意味ありげな視線を明に向けた。何か重大なことを明かそうとしているかのような顔。何を言い出そうとしているのだろうか、と明はつばを飲み込んだ。

遙は決意したように一人うなずいた。そして、額にかかっている前髪を右手ですつとすくい上げた。明はぎょつとした。髪で隠れていたのが気が付いていなかったが、遙は額にひどい裂傷を負っていた。

たのである。手術でついたと見える生々しい縫合の跡が残っていた。遥は重い口を開いた。

「事故でかなり頭を強く打ったんだけど、脳とかには異常はなかったらしいの。でも、こんなひどい傷跡じゃ、ミミズ腫れみたいになつて、もしかしたら一生残ってしまうかもしれないわ。そんなことになつたら私――」

そう言い終わると、遥は掛け布団に顔をうずめて、しゃくりあげるようにして泣き出してしまった。だが、明にはどうすることもできなかった。前髪で隠れるとはいえ、あんな傷跡を若い女性が一生背負っていかないといけないとは。明はできることなら代わつてあげたい気持ちで一杯になった。

どうしてこんなことになつてしまったんだろう。今頃、俺達はテーブルを挟んで、今日あつた面白いことなどを話しながら、夕食を食べていたはずなのに。

そのとき病室に、病院の先生らしき人物が入ってきた。先生は三十代後半くらいで、顔立ちは整つていてとても頭の切れそうな男だった。しかし、表情からは感情というものが抜け落ちてしまつていくかのような妙な印象を受けた。まるで顔に能面を張りつけたような、作り物のような微笑を浮かべていた。

「はじめまして。私、遥さんの手術を担当させていただきました佐々木と申します。どうぞよろしく」

佐々木という先生は、ベッドで泣いている遥を特に気にもせず、明るい調子で明に話しかけてきた。この場の空気の読めていないこの男になんとなく嫌悪感を感じながらも、明は言った。

「はじめまして。私、斉藤明と申します。先生、どうもありがとうございます。ございました」

「いえいえ。ところで、遥さんの調子はどうですか？」

「どうやらひどいショックを受けてしまったようです」

「そうですか」

しかし、特に遥の様子が気になるというわけではないらしい。遥のいるほうには見向きもせず、佐々木は手に持っていた紙に何かを書き込んだ。明はとりあえず遥の額の傷について、この先生に相談してみることにした。

「あの、先生ちよつと相談したいことがあるんですが」

「何でしょうか？」

にこやかな様子で返事をする。

「いえ、ここじゃちよつと 場所を変えていただけませんか？」

「ええ、わかりました」

部屋を出る前に遥に声を掛けた。

「じゃ、ちよつと先生と話してくるから。また戻ってくるからね」

しかし、遥は布団に顔を押し付けたまま、泣いたままだった。その姿を見ると、明は遥の悲しみがまるで自分のことのように感じられ、ひどく胸が痛んだ。こんな状態の遥を病室に置いていくのも忍びなかったが、遥は独りになりたいのかもしれないと思い、佐々木と廊下に出た。佐々木は遥の病室から三つ隣の部屋のドアを開けた。

「こちらへどうぞ。診察室ですが、もう診療時間も終わりましたので、お気になさらずに。」

「はい」

佐々木は椅子を勧めたので座って向かい合わせになった。

「ところで相談というのは一体なんでしょうか？」

「先生もお分かりのことと思いますが 遥の額の傷のことなんです」

「傷ですか？」

意外と言った調子で佐々木は聞き返した。わかっているくせにまるで初耳といった感じ。明はちよつと苛立ちを覚えた。

「額の傷ですよ、遥の」

「額に傷跡？一体」

佐々木は何かぶつぶつ言い出し、そのまま腕を組んで考え込んでしまった。そうして二十秒くらいの時間が過ぎた。明はどうしていいのかわからず、考え込んでいる医者顔を眺めていることしかできなかった。そして、佐々木はようやく口を開いたと思ったら、また独り言を言い出した。

「そうか、そういうことか　私としたことが、うかつだったな」

佐々木は一瞬明がいることなど忘れてしまったかのように、また独り言を言っていた。明はこんな男が遥の手術をしたことがなんだか不安に思い始めた。佐々木はなおも一人でぶつぶつ何かを言っていたので、明は声を掛けた。

「先生、ちゃんと聞いてくれてますか？」

佐々木ははつと我に返った様子で、「え？　ああ、すみません。で、遥さんの傷はどんな感じですか？」と言った。

自分で手術を執刀しておきながら何を言うのだ、この男は？

「額部分に大きな五センチくらいの傷跡が残ってしまっていたでしょう？　先生、忘れたんですか？」

「ああ、やっぱりあの傷のことか　はい、わかりました」

どうも話がかみ合っていない気がする。ちゃんと通じているのだろうか。気にしても仕方がなさそうなので、明は無視することにした。

「先生、あの傷何とか消すことはできないんでしょうか？　あれだけ深い傷だと、きつと跡が残ってしまうでしょ。あのままじゃ彼女が不憫で。あんな傷を一生背負っていくなんて　何とかしていただけないんでしょうか？　もしよろしければ、腕のいい美容整形外科などを紹介していただけたら、ありがたいのですが」

佐々木はなぜか一瞬黙り込んだ。完全な無表情ではあったが、何か思案している様子だ。だが、すぐにもとの作り物のようなにこやかな笑顔に戻り、言った。

「ご心配なさらず。当院では美容整形のようなものもやっておりま

す。それに、傷は元通りにすることが出来ますよ」

明はその言葉を聞いて、思わず喜びで飛び上がりそうになった。遥の傷が治る！ あれほど深そうな傷なら跡が残ってしまうはずだと、半ば諦めかけていたのに予想外の回答に、興奮を抑え切れなかった。

「本当ですか、先生！　お願いします！　遥の傷を治してやってください」

「まかせてください。当院の整形は世界でも唯一の方法をとっている画期的な方法を用いているのです」

「いったいどうやるのですか？」

「それはまた次にいらしたときにお話ししましょう。少々長くなってしまうのでね」

「わかりました。明日にでも伺ってよろしいでしょうか？」

「もちろん、結構ですよ」

明はお礼を言って、診察室を出た。帰り際に遥の病室をのぞいていったが、遥は泣き疲れてしまったのか、すうすうと寝息を立てていた。明日、傷が治ると遥に教えてあげたらどんな顔をするのだろう。それを思うと、帰り道の足取りも軽かった。

第4話 「傷跡」(後書き)

ようやくこのあたりから話が動き始めます。もしよろしければ、この話の続きもお付き合い下さい。

第5話 「革新的な新技術」

次の日、明は嬉々として病院に向かった。昨日はパニックのような状態で病室に駆け込んだので、改めて病院の概観を見るのは初めてだった。

建物はそれほど大きくはない。三階建てで、白く塗りたての壁が際立って見えた。

気になったことが一つあった。佐々木外科とは看板に書いてあるが、美容整形とは一文字も書いていなかった。

明は首をひねりながらも、自動ドアをくぐり受付に向かった。受付には若い看護婦がいた。

「斉藤明と申しますが、すいません、ここが美容整形の受付なんでしょうか？ ちょっとよくわからなくて」

「ああ、斉藤明さんですね。先生からお話は伺っております。診察券をこちらに」

「はい」

診察券を看護婦に渡して、待合室の席に着こうとしたとき明は驚いた。

椅子が大体三十人は座れそうな数が用意されているのに、待合室は満席で、立って待っている人がいるほどだった。

明は自分が知らなかっただけで、実はとても有名な美容整形外科医だったのかもしれないと思った。

だが、不思議なのは待合室で並んでいる人たちの顔ぶれである。

主婦のような感じの人から、老人まで色々な人たちがいた。

中には美容整形の必要など全くなさそうな、モデルのような人も何人がいた。

一体何のために彼らは美容整形をしようとしているのだろうか？ 明は不思議に思った。

しかも、みな悩みを抱えているように押し黙っており、そして何

かを覚悟しているかのようにだった。

おかげで、待合室は沈黙に包まれて異様な雰囲気になっていた。ただ事でない様子に明は息苦しさを感じながら、名前が呼ばれるのを待った。

明がようやく診察室に通されたのは三時間後だった。

診察室に入ると、昨日会った佐々木がいた。

昨日と同じく白衣で椅子に座っている。感情のないような表情は相変わらずだ。

「長い時間お待たせしてしまい、申し訳ありませんでした」

「いえ、それにしてもすごい患者さんの数ですね」

「ええ、おかげさまでね。時間もあまりないので、さっそく本題に入ることにしましょう」

「よろしくお願いします」

佐々木は説明を始めた。

「遥さんの傷を消す方法。私は昨日美容整形という単語を使いましたが、あなたが思っているらしいやる美容整形とは全く違うものだと考えてください。当院ではまず患者さんが理解しやすいように美容整形という単語を使っています。まあ、例えみたいなものです。なので、ここからは仮に当院の整形を『特殊整形』とでも呼ぶことにしましょう。特殊整形は本来の目的からすれば、これは美容整形という範疇には収まらない治療法なのです。そして、その効果は従来の美容整形とは一線を画しているといえます」。

特殊整形　と明はつぶやいた。明は美容整形業界にそんな革新的な進歩が起きていたとは全く知らなかった。ちよつと自分の無知を恥じた。

「そんな新しい技術が生まれていたとは全く知りませんでしたよ」
「それはそうです。まだこの技術を確立しているのは当院だけですからね。知らなかったというのも当然だと思います。一般的な知名度は皆無ですから。しかし、待合室を見てお分かりとは思いますが、

これまで手術を受けた方々からは絶大な支持を受けております。ありがたいことに、口コミだけで毎日患者さんが殺到しているのですよ」

「それはすごいですね。先生、それはどんな方法なんですか？」

「まあ、説明いたしましょう。言葉だけでは説明しにくいのでこちらへどうぞ」

そういうと佐々木は立ち上がり、隣の部屋へと歩いていった。明も佐々木のあとを追った。その部屋はさまざまな資料や写真などの山で埋め尽くされていた。隣の診察室の整理整頓された状態から考えると、まるで異世界に来てしまったかのように感じられた。佐々木はいすに座り、明にも座るよう言った。明が座ると佐々木は説明を始めた。

「では当院独特の特殊整形について説明をいたしましょう。しかしその前に、そもそも整形とはなにかについてから説明せねばなりません。斉藤さんは美容整形とは何だと思えますか？」

急に質問を受けてしまい、明はどぎまぎしてしまった。

「美容整形とは何か、ですか。うーん　なんですかね」

「いえ、そんなに難しく考える必要はないのですよ。整形というのは、『顔や体の形を変えること』であります。事実を述べればそれまでです。しかし、美容整形を希望する人々の目的は、『顔や体の形を変えること』、それ自体が目的ではありませんね」

「はあ」

明は適当な相槌をうった。

「そう、美容整形を受ける患者さんの目的は『顔や体の形を変えること』にあるのではなく『今よりも美しくなること』にあるのです。『そして今よりも美しくなる』という事をさらに突き詰めると、『自分は醜いという苦しみから解放されること』が目的であるといえます。この『自分は醜いというコンプレックスを解消する』という事が美容整形の目的であります。しかし、ここで厄介なことは美し

さというものは絶対評価をすることはできない、ということでしょう。美しさというものの基準は見る人それぞれです。どんな絶世の美女でも、百人が見て全員が美しいと思うとは限らないでしょう？ 中にはその美女を醜いと感じる人もいるかもしれません。例を出してみましよう。ちよつと言いは悪いですが、自他共に認める不細工な女性がいたとします。その不細工な女性は、自分は不細工であるという苦しみから解放されたいと願い、美容整形をしました。整形が終わる、周りの人々は彼女を見て、以前よりもずっと美人になったと感じました。しかし、当の本人は、整形の結果に納得がいらず、自分は美しくなったどころか、自分は前よりも不細工になったとさらにコンプレックスを抱えてしまいました」

佐々木は一つ咳払いをして続けた。

「さてこの場合、彼女の整形手術は成功したといえるでしょうか？ 彼女は周りの人々が考えている美しさは手にしましたが、彼女の中では自分は醜いというコンプレックスを抱えたままです。美しさを測る絶対的なものさしがないために、外見を変えるだけの、従来の整形手術では、『自分が醜いという苦しみ』から解放されないことがよくあるのです。そこで、私は新たな整形手術である特殊整形を考え出しました。」

そこまでばんやりと聞いていた明は、いよいよ本題に入ってきたと感じあわてて背筋をのばした。

「特殊整形は従来の整形とは異なり、根本的な解決を図るものです。自分が醜いと感じる患者はこの特殊整形のある方法によって、患者は自分が満足できる完全な美を得ることが出来ます。さらに画期的なことに特殊整形は、自分の醜さの苦しみだけでなく、人間が抱える全ての苦しみ、コンプレックスを解決できるということです。どんな悩みも特殊整形さえすれば全て解決なのです」

明は驚いた。自分が知らぬ間にそんなに医学が進歩していたとはしかし、いったいどのような方法なのだろうか。質問しようとする明を遮るように佐々木は立ち上がり、部屋の電気を消すと壁の何か

のスイッチを押した。すると映写機が動き出し壁に映像が映しだされた。

第5話 「革新的な新技術」（後書き）

これまで短編しか書いてこなかったので、連載モノの難しさを実感しています。短編とはまた違った難しさがありますね。最近では家でも電車でも小説のことばかり考えています。なので、感想、アドバイスいただけたら幸いです。

よろしければ、この話の続きにもお付き合い下さい。

第6話 「人參嫌いをなくす方法」

そこには十歳くらいの少年が映っていた。少年のいる部屋は広くもなく狭くもない真っ白な壁に囲まれた部屋で、少年が座っている椅子と机以外には何も置かれていない。そして彼の目の前にはシチューが置かれている。

すると撮影をしているらしい人物が少年に、それを食べなさい、と言った。明はその声が、先ほどから明が相談をしている男の声であることに気づいた。

そして、言われるままに少年はシチューを食べ始めた。二分ほどでシチューを食べ終えたかに見えたが、カメラが皿によっていくと一種類の具だけがつまはじきにされていることがわかる。

「この少年は私の患者です。これは彼が特殊整形をする前の映像です。ほら、見てください。いくらか具が残っているでしょう？これは人參です。まあお分かりかとは思いますが、彼は人參が嫌いなんです。どんなに細かくして混ぜても、彼は食べません。一口食べただけですぐに気が付いて吐き出してしまいます。筋金入りの人參嫌いです。では続きを見てください」

いったん画面が切り替わった。しかし画面には先ほどと同じ部屋で同じ少年が映っている。しかし、一つ違っていることは、彼の前に置かれているものは、シチューではなく、皮を剥いただけの生の人參であった。

そこからの彼の行動は明の予想を見事なまでに裏切った。

なんと少年はひたたくるように人參を取ると、いきなり人參にかじりついたのである！

その食べ方は飢えた獣のような勢いで、あっという間に人參は少年の胃袋の中に納まってしまったのである。画面中の尋常でない少

年の勢いに圧倒されて、明はただただ驚いて、口をぽかんと開けているばかりであった。

「こ、これは　　どういうことですか？」

明は数秒後によろやくはつとして、そう尋ねるのが精一杯だった。そんな明を見て佐々木は言った。

「びつくりしたでしょう？彼は私の整形を受けて人参が嫌いという苦しみから解消されました。それどころか人参が大好きになりました。これが私の整形の成果です」

明は狸にでも化かされたような気分になった。どんな方法を使ったのか知らないが、人間はそんな簡単に変わるものなのだろうか？　だいたい手術後の少年の顔つきは尋常じゃなかった。いったいこの男はあの少年に何をしたのか。先ほどまで、遥の傷を消し去ってくれる天使のように見えていた男は、このときの明には、薄気味の悪い魔法使いのようにしか見えなかった。

「その整形とはどんな方法なんですか？いい加減教えてくださいよ　これじゃまるで催眠術を見ているみたいです」

明がそう言ったのを聞いて佐々木は、ほう、と言い、少し感心しているようだった。

「催眠とはいいところを突いてきましたね。しかし当たらずとも遠からず、つてところですかね。考えてみてください。催眠術は暗示のかかっている間しか効果がないんですよ。それじゃあちつとも苦しみを根本的に解決できてないじゃないですか」

「それじゃあ、どういう方法を使っただんですか！」

明はだんだん苛ついてきた。

「まあまあ、そう怒らないでくださいよ。今お教えしますから……さてでは、人間に催眠術のような暗示をずっとかけ続けるにはどうしたらいいと思います？　もうわかったんじゃないですか？非常に単純なことですよ　　」

「わかりませんよ！いいかげんに教えてください！」

明の苛立ちは限界に達した。

「では種明かしをしましょう　マジックと同じで種が分かれば納得ですよ。脳に錯覚を一生かけ続ける方法、それは」

「脳に直接手術を施すことです。脳の神経細胞などに手を加えることです。これが私の特殊整形、通称、脳内整形です」

「な、なんだって　脳に整形手術をする　そんなばかなことが

」

明はそれ以上言葉が出なかった。

「一体何がばかなことなのです？私の手術法なら誰でも、どんな悩みでも、簡単に解決することが出来るんですよ。こんな素晴らしい技術は他にはない」

そういつて佐々木は一人で拍手をした。そして、リモコンを手に取り映写機に向けてボタンを押した。すると壁一面に人間の頭頂部がばっくりと割られた映像が映し出された。明はそれをみて思わずもどしそうになった。

「おっと失礼　初めての方には刺激が強すぎましたね。まあちよつとの間、我慢してください。ごらんの通り、これは脳内整形手術の映像です。そらあんなふうに、脳の器官である海馬をレーザーで局部的にいじったり、前頭葉を針でつついてみたりしましてね。すると手術後に、患者は見えもしないものが見えるようになっていたり、思い出したくない記憶がなくなっていたり、嫌いなものがどうしようもなく好きなものになっちゃってしまったりするので。ほかにも様々なことが可能です。まあ、脳のどこをいじればどう変わるのかがわかるのは、世界中でも私だけでしょう。私はこの研究に人生をかけてきたのですから。美容整形を目的とする場合には、自分の姿を見たら脳から快樂物質を分泌されるように手術すればいいわけです。そうすれば必ず自分の姿が大好きになるでしょう？従来の美容整形のように、手術後に自分の思い描いていた姿とのギ

ヤップに後悔するなどといった心配は全くありません。ただ、自分の容姿に酔いすぎて、ナルシストになってしまう心配は多少あります。ちなみに、先ほど映像でお見せした少年のときは、彼の脳にある、『人参は嫌い』という記憶をいったん消してから、人参が好きになるように、人参を見たら脳内に快樂物質が分泌されるように脳内整形したんです」

明は啞然とした。

狂気の沙汰だ。

第7話 「正気と狂気」

「そんな：そんなことが許されると思ってるのか！人間がそんなことまでしていいと思ってるのか！生命を冒涇している！」

明の声は震えていた。

「許されるのか、ですか。それは一体誰が決めるのですか？では、遺伝子組み換えってのはどうなんです？あなただってそういう食材を食べたことがあるでしょう？ あれは生命の冒涇ではないのですか？ それにクローンはどうです？ まあ、さすがに人間は認められてないようですが、羊やら猿になら認められています。それでも私の脳内整形を生命の冒涇だといえるのですか？ あなたもさつき待合室を見たでしょう？ あれだけの数の人たちが、心の苦しみから解放されるために、私のところへ脳内整形手術を受けに来ているんですよ」

明は混乱した。しかし、到底そんなことは認められない！

「しかし：あなたがどう言おうと、脳内整形なんてものは聞いたこともないし、まだ認可されていないはずだ！ 法律があなたを許さないぞ！」

そういうと、佐々木は軽くため息をついた。

「まあ確かに、法的にはまだ認められていませんね 表面上は。でも、裁判をしたって私は負けることはないでしょう。というより、起訴されることもないと思います。なぜなら、私は多くの裁判官や検察官をすでに脳内整形していますから。その中には最高裁の裁判官さえいました。彼らは人の手で同じ人を裁いていいのか、ということにひどく苦しんでいたのです。あなたにわかりますか？ 犯罪者とはいえ、被告の一生が自らの采配しだいで決まってしまうことのプレッシャーが。そして、もしかしたら有罪を下したあの被告は無罪だったのかもしれない、という疑いを抱きながら生活するつらさが。正直私にもその苦しみはよくわかりませんが、とにかく

く私は彼らをその苦しみから脳内整形をすることで解放してあげました。彼らは何の苦しみもなく、死刑も下せるようになったのです。しかし、彼らは自分が違法な手術を受けたことが世間に知れたら大変ですから、きつと私が裁判沙汰にならないように妨害工作をしてくれるはずですよ」

「そんな あ あなたはそんなことをして正気でいられるんですか！」

もうこの男を説得するには良心に訴えるしかない。そんなことが効果ないだろうことはすでに分かりきっていたが、明は言わずにいられなかった。

「正気でいられますよ。まあ確かに過去に一度苦しんだ時期はありました。もうそれも過去のことです。そんなことより、あなたは遥さんの傷を消すためにここにきたんでしょう？ 脳内整形ならそれができる。遥さんの脳に手術を施すことによつて、自分の視覚には、額の傷跡が認識されないようにすればいいだけです。どうですか？ 脳内整形の素晴らしさが、おわかり頂けましたでしょうか」

明は怒りに震えた。

「ふざけるな！ 遥にそんなことをさせてたまるか！」

「そうですか。それならそれでも構いませんが。そうだ、じゃあ試しに斉藤さん、あなた脳内整形やってみませんか？ 絶対に気に入っていただけると思っただけですがね」

明は心底あきれた。この男は俺にまでこんな馬鹿げた手術を受けさせようとしているのか。

「もう、いいかげんにしてくれ。こんな狂った場所にはもう一秒だつていたくない」

明がそういうと、佐々木の目の色が少し変わったような気がした。「あなたはどうしてそこまで私の脳内整形を否定するのですか？

これは世の中の全ての人達の悩みを解決できる人類史上最高の技術といつてもいいですよ。私にはあなたの考えが理解できない」

「脳を都合よく改造するなんて正気の沙汰じゃない。そんなものを受けた人間はもはや人間ではない！」

明は大声を出しながら、その怒りがますます増していくのを感じた。

「人間ではない？ では、あなたは何をもって人間というのですか？ では、私の手術を受けた人間は何だというのです？ 遺伝子的に見ても間違いなく人間でしょう？ あなたの言う人間とそうでないものの境界線とは何なのですか」

佐々木は明に詰問する。

「それは それは心だ！ 人間らしい心を持ってこそ人間というものだ！ 脳をいじくって作られた偽物の心など人間とは言えない！」

明は思っただまを叫んだ。佐々木は冷たい声で応答する。

「偽物？ そもそも人間の心などというものは、厳しい自然環境の中で生存競争を勝ち抜いていくために進化の過程で作られたものに過ぎないでしょう。遠い昔から人間は、そのひ弱な肉体をカバーするために頭脳を肥大化させてきた。そして、群れと呼ばれる共同体を強化させるために意識というものを作り出した。ですから、喜びも、悲しみも、怒りも、罪悪感も、愛も、人間という種が生き残っていくために生み出された幻に過ぎないのです。しかし、現代では人間を助けるべき『意識』が逆に複雑化しすぎて、無用な苦しみやコンプレックスを感じたり、他人を蹴落とす人間を増やすような働きをするようになっていく。自殺、引きこもり、いじめなども意識の複雑化が原因なのです。私は『意識』の本来持つべき役割を蘇らせるために脳内整形の研究を始めたのです」

「訳のわからないことばかりぬかすな！ 人の心というものはそんな理屈でばかり片付けられるものじゃない！ あんたは愛さえもわからないのか。本当に淋しい人間だな」

明は嘲るように言い捨てた。

「淋しいなどという感情は私にはわかりませんが、先ほど申し上げ

たように愛など意識が作り上げた幻に過ぎません。」

こいつは完全な狂人だ。どうすればこんな人間が生まれるのだ？
いや、きつとこいつは人間ではないのだろう。明はそう思った。

「もうこれ以上あんと話し合いを続ける気はしないな。頭がおかしくなってしまう」

明がそういうと佐々木はようやく説得を諦めたようだった。

「それは残念です。では、どうぞご自由にしてください。ですが、
遥さんの傷を治すことができるのは私だけですから。あなたは彼女
に何もすることができない自分の無力さに耐えられるでしょうか。
耐えられなくなったらまた当院にいらしてください」

「うるさい！」

明は勢いよく診察室のドアを開けて、遥の病室に向かった。

ノブを回して病室に入る。

勢いよくドアを開けたために、ベッドで横になっていた遥が驚いた顔を向けた。

「どうしたの？」

「こんなところは早く出るんだ。ここにいたらおかしくなっちゃう」
その時、佐々木が開いたドアの向こうから相変わらずの無表情さ
で、二人を見つめていた。

「何の用だ」

「いえ、別に何の用もありませんが」

確かに何の用もなさそうな顔をしていたが、佐々木は興味深そう
にこちらを眺めていた。まるで、自分の製作した絵画が何かを見て
いるような顔。その視線の意味がいまいちよく解らなかった。

「さあ、行こう」

明は遥の手を引いて、視線から逃げ出すように、立っている佐々
木の横を急いですり抜けて走り出した。

そして、多くの人が沈んだ表情で順番待ちをしている待合室を駆
け抜けて、病院の玄関を飛び出した。

病院を出てもしばらく走った。明には、頭を強打した病人を走らせるのは危険だ、などという考えは浮かばなかった。あの狂気の世界から少しでも離れたかった。

どのくらい走ったのだろうか。息がなくなつて明は足を止めた。

「どうしたのよ。急に退院するって言つたと思つたら、走り出すし。明、今日ちよつと変よ」

息を切らしながら遙が言つた。

「いや、なんでもないんだ。遙は気にしなくて大丈夫」

明も息を切らして言う。

「本当に大丈夫？」

「大丈夫だつて。さあ、家へ帰ろう」

遙はまだ納得がいかない様子だったが、明に黙つてついてきた。

額の傷跡が前髪で隠れているか氣遣うようにしながら。その様子を見て、明は胸が痛んだ。

だが、明はその時になつて氣が付いた。病室から遙の手首を握つたままだつたのだが、自分の手のひらに遙の強い脈動が伝わってくることに。その脈動は、遙が生きていることを主張しているかのように力強かつた。急にたまらないほど愛さがこみ上げてくるのを感じた。ほとんど泣きそうになっているのを明は必死でこらえた。

本当に遙が生きていて良かった。額の傷がなんだというのだ。遙が生きていてさえいてくれればそれでいい。あんな頭のおかしい医者の手術に頼らなくても大丈夫だ。これから自分がゆつくり時間をかけて、遙の心を癒していこう。そう明は強く決心した。

そして、明は遙の手首を口元に持つてきて、軽くキスをした。唇に彼女の体温が伝わる。遙は生きているんだ。何度も心の中で繰り返す。

返した。

「明、今日はほんとに変ね」

遙はくすぐったそうに、笑みをこぼした。

第7話 「正気と狂気」(後書き)

この連載は次話で最終話をむかえる予定です。ここまで読んでくださった方、どうぞ最後までお付き合い下さい。

最終話 「診察記録」

その日の夜。

診察時間が過ぎて、佐々木病院の待合室には誰もいなくなった。看護婦たちも帰宅して、病院内は静まり返っている。

佐々木は全ての診察を終え、明と話をしていた資料室で、今日の出来事をいつものようにノートに書き付けていた。佐々木は脳内整形を始めるようになってから、このノートに、手術で気が付いたことや、反省点などを書くことを習慣にしている。五年間でノートは何十冊にもなった。これは佐々木にとっての宝のようなものだ。

そして佐々木は、先ほどの斉藤明のことについてペンを動かしていた。ノートには次のようなことを書いていた。

全く昨日の脳内整形手術では、とんだミスをしたものだ。斉藤明に施した脳内整形は完璧だと思っていたのだが。

斉藤明に行った手術のミスの原因はわかっている。

昨日、交通事故で脳内出血により死亡した遥という女性の傷跡を考慮に入れなかったことだ。

まあ、彼女はこの病院に運ばれなかったのだから、仕方ないといえよそれまでのことだ。実際に、交通事故にあった遥の手術をしたのは、佐々木病院ではなく、全く別の病院だったのだから。私は遥の顔さえも見た事はない。それがミスの原因だ。とにかく、今回のことは、今後の脳内手術の注意点とすべきだろう。

斉藤明は昨日の夜、佐々木病院に駆け込んできて脳内手術を希望した。どうやら、別の病院で遥の死体を見て、その病院からそのまゝ大急ぎで来たらしい。彼は心神喪失状態で、遥を失った悲しみでぼろぼろになっていた。彼は以前、知り合いから当院の特殊整形のことを耳にしていたそうだ。それを思い出して、彼は佐々木病院へやってきた。彼は泣きながら訴えた。彼女がいなければもう生きていけない。なんとかして、彼女をもう一度甦らせてくれ、と。

彼が希望した脳内整形のポイントは三つ。

- 1．当院で手術を受けた記憶、また当院について事前に知っていた記憶を全て抹消すること。
- 2．遥が交通事故で死亡したという記憶を全て抹消すること。
- 3．今も遥が生きていると思えるように、斉藤明にしか見えない遥の幻影を作り出すこと。

手術自体は成功だった。斉藤明が当院の病室で意識を取り戻したとき、彼は手術を受けた記憶を一切失って、私の顔さえも覚えていなかった。そして病室で、私は聞いてみた。「遥さんの調子はどうですか？」と。すると、彼は誰も寝ていない空のベットのほうを見て、

「どうやらひどいショックを受けてしまったようだ」と言った。私には何も見えなかったが、彼だけには遥の幻影を見えていたようだ。

だが、ミスはあった。

明は突然、遥の額の傷が、と言い出した。初めは意味がわからなかったが、しばらく考えてようやく思いついた。斉藤明が手術を希望してやってきたとき、泣きながら話していた内容を思い出したのだ。脳内手術を施す前に、明はこんなことを言っていた。

ちよつと見ただけでは、遥が死んでいるなんて信じられなかった。額の大きな傷以外に外傷は全く無かった、と。

それで私は気がついた。

彼が今、目にしている遥の幻影の姿は、最後に遥を見た姿であるということに。つまり交通事故にあつて霊安室に横たわっていた遥の姿だ。その遥の死体には、バイクに轢かれたときについてしまった額の傷があつたに違いない。遥の脳に致命傷を与えた額の傷が。つまり、その額に傷の付いた遥の死体と同じ姿の幻影が、明には見えているという事になる。それに加えて、明の記憶の表面からは脳内手術によつて消えてしまつてはいるが、潜在意識に刻まれた遥の死というマイナス要素が、額の傷を負つて悲しんでいる遥という幻影を作り出してしまつたのだ。

全く脳の働きというものは面白い。

そこで、今日私は、脳内整形の素晴らしさを改めて彼に説き、今度は額に傷のない遥の幻影を作り出すために、なんとか彼にもう一度、脳内整形を受けさせようと試みた。

下手にショックを与えないために、今見えている遥はただの幻影であるという事を教えないように気をつけながら。だが、説得は失敗に終わった。どうやら彼の怒りの琴線に触れてしまつたらしい。

明は診察室を飛び出して、誰もいないベッドから遥の幻影を連れ出して、病院を駆け出していつてしまつた

そこまでノートに書いて、佐々木は顔を上げた。

そもそも、明は遥の幻影などではなく、遥の存在自体を忘れるように手術したほうが良かったのだ、と佐々木は思った。明に手術を受ける前に何度もそうすることを勧めたが、彼は聞く耳を持たなかった。遥のことを忘れたくはないと言い張った。愛というものはもう佐々木には理解できないものになっているので、当然彼の気持ちも理解できなかった。

あるいは、記憶は保ちながらも、感情を失くしてしまえば良かったのかもしれない。

佐々木の隣では映写機が回っている。そして、壁には今日、斉藤明に見せた、人参を食べる少年が映っている。それを見ながら、珍しく佐々木は昔のことを思い出した。

この人参を食べる少年を脳内整形したのはもう五年も前のことだ。彼は脳内整形の第一番目の被験者だった。そして、これまでの脳内整形のキャリアの中で、唯一の大失敗であった。

それまで猿などを使って脳内整形の実験を繰り返してはきたが、どうしても人間の脳を使ってみなければ脳内整形の正しい効果はわからなかった。

そこで、この少年を選んだ。他に脳内手術を行うことのできる被験者はいなかった。手術後、彼は人参嫌いがなくなり、人参が大好きになった。手術は成功だと思った。

だが、異変はすぐに現れた。手術の際に神経細胞を深くえぐりすぎてしまったのだろう。彼は、人参しか受け付けない体になってしまったのだ。人参以外の食品を食べさせようとしても見向きもしない。無理やり食べさせようとしても吐き出す。水分さえもとらない。人参しか食べようとしないので、当然少年は衰弱していき、最後には餓死してしまった。

本当にひどい失敗だった。佐々木は自分が心底恐ろしくなった。自分は神に逆らうとんでもないことをしてしまったのではないかと。一日中泣き伏した。もう気も狂わんばかりだった。

当然といえば当然だ。人参を食べていたあの少年は、佐々木の実の息子だったのだから。息子の死後、佐々木は苦しんだ。もう気も狂いそうだった。当時、佐々木は研究に没頭しすぎて、妻に愛想を付かされ、彼女は別の男と逃げてしまっていた。息子は母親から置いてきぼりをくらってしまっていた。そんなことも知らずに、母親はいつか帰ってくるものと信じて、無邪気な顔で佐々木になついていた息子を実験材料にしてしまったことを、後悔し続けた。

そして、息子の死から一週間がたち、この苦しみから逃れることのできる唯一の方法があることに気が付いた。

佐々木は頭頂部をなでてみた。わずかに五年前の手術痕が残っているのがわかる。

そう、自分で自分の脳を整形したのだ。息子を失った悲しみと罪悪感から逃れるために。手術は局部麻酔を使い、鏡を見ながら行った。特に問題はなかった。手術後、意識がはつきりし始めると、あれほど心にのしかかっていた悲しみを、まったくといっていいほど感じていないことに気が付いた。完全に爽快な気分。息子の死も、これから多くの人々が救われることを考えれば、大事の前の小事と割り切れるようになった。

今では、たくさんの患者達が脳内整形を受けることを希望している。佐々木はこの世の悲しみ、苦しみ、コンプレックスを解放することができなのだ。悩みを抱えている全ての人達の救世主となったのだ。

佐々木は脳内整形について研究していた頃から、ずっとそうなることを望んできた。だが、もうそんなことはどうでもいいことだ。佐々木は、もう苦しむことも喜ぶことさえもなくなってしまったのだから。

佐々木はもう一度、映写機から映し出されている映像を見た。なおも彼の息子は人参を食べ続けている。見ていても何の感情も湧いてはこない。彼は自分が殺したようなもののな。

資料室に置かれている鏡を見た。そこには、何の意味もない微笑をたたえた佐々木が映っている。

まるで生気を感じない。

この鏡に映っている男は本当に生きているのだろうか？佐々木は疑わしくなった。試しに昔、息子の死で苦しんだときの自分の泣き顔をまねしてみた。

だが、佐々木にはできの悪い人形のような表情しか、作ることができなかった。

最終話 「診察記録」（後書き）

このお話はこれでおしまいです。よろしければ感想評価などよろしくお願いいたします。

最終話を読んだら、改めて第1話を読み返してみてください。本来第1話はエピソード的な位置づけになっています。そして、読んでいただければ、第1話の最後の一文の意味が分かっていただけだと思います。

最後まで読んでくださった皆さん、本当にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5796a/>

人間の境界線

2010年10月8日15時47分発行